

# 駅

三年

回数 14  
筆順  
オン  
クソ

馬馬馬馬  
馬馬馬馬  
馬馬馬馬  
馬馬馬馬

成り立ち



むかしは、長さをはかるのに、手をつかいました。親ゆびをもとにして、ほかのゆびをいっばいにのびした長さを「尺（年 905）」といいましたが、「尺」はそのときの手の形をあらわしたものです。

長い長さは、尺とり虫がすむように「つきつき」に手をうつして、一尺二尺三尺とはかりました。

むかし、いそいでたびをする人のために、町町に馬をよいういしておき、一つの町の馬は「つき」の町まで行くようにし、「つきつき」に馬をのりかえて行きました。それで、「つきつきに馬をのりかえるところ」を駅といいます。

〔旧字体は「驛」で、「代える」意味の「驛」と馬との会意・形声字であり、駅はその仮借である。驛も尺も漢音はセキ（エキ）で、呉音はシヤク（ヤク）である。〕

使い方

▽むかし、江戸（今の東京）と京都をむすぶ東海道には宿駅が五十三ありました。それで、これを「東海道五十三次」といいました。「次」とは、「馬を次々とのりかえるところ」といういみのことばです。

▽今の駅は馬のかわりに電車や汽車がかつやくしています。けれども、「駅」と書かないで「駅」と書くところがあつておもしろいと思います。

熟語例

▽宿駅（宿屋や中つぎの馬のよういしてあるところ。むかし、たび人がとまったり、馬をのりつきするせつびがある大きな町のことです。宿場、宿場町）

▽駅伝（むかし、宿駅からとなりの宿駅に人やにもつをおくり伝えました。この「駅」から「伝」に「くみ」のこと。今は、長きよりのリレーによる競走のいみにつかわれています。〔例〕箱根駅伝）

▽駅員（駅につとめている人）

▽駅頭（駅のあたり。駅ホームのいみにもつかわれます。頭は「あたり」「ほとり」のいみ）

▽駅弁（駅で売っている弁当）

# 央

三年

回数 5  
筆順  
オン  
クソ

口口央

成り立ち



むかしは、罪人がじゆうに動くことができないうように手には手かせ、足には足かせ、首には首かせをはめました。央という字は、人が手かせ首かせをはめられている形を表した字で「わざわい（今の「殃」のいみ）」といういみの字です。

人が「口」のまん中にいる形ですから、この字が「まん中」といういみだけにつかわれるようになり、今は「まん中」といういみだけにつかわれ、「わざわい」といういみには「殃」という字が作られました。

使い方

▽友だちと三人で写真をとりました。向かって右が石川君、左が田坂君、中央にいるのが、ぼくです。

▽わたしの家の近くの広い道路には、中央に、分離帯があります。分離帯があると、安全だし、植込みがあつたりして、きれいです。

熟語例

▽中央（まんなか。中心。また、働きの上で、中心になつてるところ。〔例〕中央郵便局）